

# 東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（十四）

— 図書館・博物館とその周辺の蔵書印 —

中善寺 慎

## 既刊連載目次

- |   |                         |        |
|---|-------------------------|--------|
| 一 | 朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印     | 書報 35号 |
| 二 | 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上） | 書報 36号 |
| 三 | 僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下） | 書報 37号 |
| 四 | 国学者の蔵書印（上）              | 書報 38号 |
| 五 | 国学者の蔵書印（下）              | 書報 39号 |
| 六 | 漢学者・漢詩人の蔵書印             | 書報 40号 |
| 七 | 学校・教育機関の蔵書印             | 書報 41号 |
| 八 | 医家・本草家の蔵書印              | 書報 42号 |
| 九 | 大名・藩主とその家の蔵書印           | 書報 43号 |

- 十 幕臣・藩士の蔵書印 書報44号
- 十一 戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印 書報45号
- 十二 商賈・実業家・企業の蔵書印 書報46号
- 十三 近代の学者・教授の蔵書印 書報47号

## 凡 例

- ・ 印影は縮尺任意の単色写真である。
  - ・ 印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
  - ・ 複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に\*印を付した。
  - ・ 資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
  - ・ 蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。
- 市古貞次「ほか」編『国書人名辞典』
  - 井上宗雄「ほか」編『日本古典籍書誌学辞典』
  - 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
  - 国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』
  - 平凡社編『日本人名大事典』
- ・ 配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。



# 浅草文庫

明治前期の東京浅草に開設された官立図書館。昌平坂学問所と和学講談所の旧蔵書を基幹として明治五年（一八七二）に東京湯島に設けられた文部省博物館の書籍館を前身とする。翌年に太政官正院の博覧会事務局に所管を変え、ついで蔵書を浅草蔵前八番堀の旧米倉跡に移して明治八年（一八七五）内務省博物館所屬として浅草文庫の名称で開館した。当時の蔵書数は和・漢・蘭書等合計約一四万余冊で、蔵書目録に『博物館書目』、『博物館書目解題略』等がある。明治十四年（一八八二）上野公園新博物館への移転により閉鎖。浅草文庫の蔵書は博物館書籍室を経て、明治十七年太政官文庫の創立と共にその管理に移った。その後、蔵書の大部分は内務省図書局の所管を経て現在国立公文書館内閣文庫に継承される。また、一部の蔵書が宮内省へ移管されて宮内庁書陵部に現存するほか、医書・本草・書画法帖類の一部は備用図書として残り東京国立博物館の所蔵となっている。掲出書は林羅山旧蔵本。昌平坂学問所を経て浅草文庫に引き継がれたもの。各冊巻頭に捺される「浅草文庫」印の楷書の印文は三条実美の筆と伝えられ、東京国立博物館に鋳銅印が現存する。

「浅草文庫」（72）

『集千家註批点杜工部詩集』（二―Bird―一二）

朝倉無声（一八七七—一九二七）

明治・大正期の江戸文化史研究家。明治十年（一八七七）大阪府若江郡八尾町の商家に善次郎の次子として生まれる。名は亀三、号は無声・移山子・紙魚堂主人・夢世居主人など。

早稲田専門学校国文科で国語漢文を専修する。卒業後は帝国図書館に奉職、明治四十四年まで書目掛。国書刊行会の事業に参画し古典の翻刻・編纂を手がけ、雑誌『此花』『風俗図説』等の編集に携わった。『日本小説年表』『見世物研究』『本邦新聞史』等の著作がある。岩崎文庫中に『岡場所風俗図志』（三―H―a―ほ―四）『観物画譜』（三―H―a―ほ―一六）『見世物年代記』（三―H―a―ほ―一七）が収められている。江戸文学を中心に多くの書物を収集し、蔵書家として知られる。大正十四年（一九二五）病を得て不遇のうち昭和二年（一九二七）東京下谷区上野桜木町の自宅に没す。郷里の八尾光南町の共同墓地に葬られる。

「無声」印は著者検印としても使用されていたようである。

「朝倉」（8）

『観物画譜』（三―H―a―ほ―一六）

「無声」（25）

『見世物研究』（IX―二―一七）

\*『観物画譜』（三―H―a―ほ―一六）

「無声（小）」（16）『新修日本小説年表』（VII―F―一〇）





新井政毅（一八二七—一九〇二）

明治期の国学者・歌人。文政十年（一八二七）武蔵国川越志義町の商家麻屋に善政の子として生まれる。幼名は栄吉。通称は甚太郎。字は約夫、伯夫。号は琴斎、梅園。海保漁村・尾高高雅に師事し、和歌を能くした。学問を好み、国書・漢籍に精通し、蔵書に富む。明治維新後は文部省・陸軍省・太政官奉政局などに出仕し、浅草文庫の官員として書籍目録解題略の著述を担当した。明治二十年頃には職を辞して川越に帰郷し自適の生活を送る。明治三十五年（一九〇二）没。墓所は川越養寿院。蔵書の一部は川越市立図書館に寄贈されている。

「新井氏図書記」（19）

『正平本論語』（三〇二二九）

# 蟻川記念文庫



## 蟻川図書館

平成四年（一九九二）六月二三日開館の長野県下高井郡山ノ内町の町立図書館。電子部品メーカー社長の蟻川浩雄が建設資金などを寄付し設立された、長野県図書館協会に加盟する図書館である。開設当時の蔵書数は約二万八千冊。蔵書中の特殊コレクション「蟻川記念文庫」は、寄贈者浩雄の父で山ノ内町出身の政治家・蟻川五郎作（一八六六—一九四六）の旧蔵書五八六七冊である。このうちの九二三冊（漢籍一八点、和刻本四二点、国書九九点）が平成二十三年（二〇一一）蟻川浩雄により東洋文庫に寄贈された。『東洋文庫書報』四三号に清水信子「蟻川五郎作氏旧蔵書目録」を掲載する。

「蟻川記念文庫」（57）

『周易』（一—二三八）

『邵康節先生一撮金易数』（Ⅲ—八—A—三）

\* 『唐詩三百首註疏』（Ⅳ—一—四〇二）ほか

「山ノ内町立蟻川図書館平4・6・23成」（32）

『周易』（一—二三八）

『邵康節先生一撮金易数』（Ⅲ—八—A—三）

\* 『唐詩三百首註疏』（Ⅳ—一—四〇二）ほか



伊佐早謙（一八五七—一九三〇）

明治・大正期の郷土史家。安政四年（一八五七）出羽国上花沢信濃町の御小納戸組の家に生まれる。幼名は幸吉。号は樞軒・宕山。興讓館提学の片山弦斎に漢学を学んだのち、山形師範学校の助教諭となり、米沢中学校教諭などを勤めた。散逸した興讓館旧蔵書の回収に奔走し財団法人米沢図書館の創立（明治四十二年）に尽力、大正元年（一九一二）にはその第二代館長に就任した。また、他方で上杉家記録編纂所総裁を嘱され、『奥羽編年史料』等の編著がある。昭和五年（一九三〇）没し番正町松原寺に葬られた。没後に上杉家に献上された旧蔵書の林泉文庫は、昭和十三年米沢図書館に寄託され、戦後は市立米沢図書館のほか、米沢女子短期大学図書館・山形大学教育学部図書館・瑞竜院（山形県白鷹町）の所蔵となっている。

掲出書中の『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』は、米沢藩上杉家旧蔵本でもある。

「伊佐早兼古書之宝」（22）

『樂善録』（XI—一七）  
『春秋経伝集解』（二—C a—）  
『六韜』（三—A k—五）

\* 『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』（五—C 六—）

「兼印」（11）

「樞軒」（11）

『六韜』（三—A k—五）  
『六韜』（三—A k—五）

「林泉文庫」（32）

『平洲先生嚶鳴館遺稿』（Ⅶ—四—B—一—八）



市島春城（一八六〇—一九四四）

明治から昭和前期にかけての政治家。安政七年（一八六〇）越後国北蒲原郡水原の、豪農の筆頭分家である角市市島家に治郎吉の長男として生まれる。名は謙吉。幼名は雄之助。号は春城・双鱼堂・小精蘆・紅霧山房など。東京英語学校を経て東京開成学校（のちの東京大学）に進むが、明治十四年に大学を中退して大隈重信の立憲改進黨に参加。ジャーナリストとして「内外政事情」「高田新聞」「新潟新聞」などに活躍し、明治二十四年（一八九一）より読売新聞主筆となる。衆議院議員を三期務めるが咯血を機に政界を離れ、明治三十四年から東京専門学校（のちの早稲田大学）の経営に専念し、幹事・理事・名誉理事を歴任する。明治三十五年早稲田大学図書館初代館長。明治四十一年日本図書館協会初代会長。日清印刷（のちの大日本印刷）・国書刊行会・大日本発明協会などにも携わり、図書館・出版等の文化事業に広く貢献する。鑑識眼に優れ多くの書籍を収集し、また随筆家としても名声がある。昭和十九年（一九四四）に没。早稲田大学には市島春城資料として日記・稿本・家伝資料などの大半が架蔵されるほか、書簡・書画・印章などが新潟県立図書館春城文庫に、七〇〇題におよぶ旧蔵印が富岡美術館に収蔵されている。

「春城清玩」（23）『花壇大全地錦抄』（XV—III—B—16—60）

『沙石集』（三—A—b—四—三）

\*『平家物語』（三—A—d—四—四）

『素問入式運氣論奥』（三—A—j—九）





今泉雄作（一八五〇—一九三一）

明治・大正期の美術史家。諱は彰。字は有常。幼名は亀太郎。号は文峰・也軒・无礙庵・常真居士。嘉永三年（一八五〇）南町奉行支配組同心今泉覺左衛門の子として江戸八丁堀北島町に生まれる。野田笛浦に儒学を、高林二峰に書を学ぶ。慶応元年（一八六五）昌平坂学問所に入學するが間もなく廃校に遭う。維新後は語学を学び明治十年（一八七七）フランスに私費留学、ギメ美術館の客員となり東洋美術史を研究する。明治十六年帰国後は文部省事務局に出仕した。岡倉天心とともに東京美術学校の創立に参画し、開校後は教職監理の任に就く。のち京都美術工芸学校校長・帝室博物館美術部長・大倉集古館館長などを勤めた。また、古社寺保存委員・日本美術協会理事・帝国博物館評議員を歴任する。晩年は美術鑑定家としても知られた。昭和六年（一九三一）没。牛込宗柏寺に葬る。著作に『君台観左右帳記考証』等がある。茶道関係の旧蔵書および田券類が国立国会図書館に収蔵される。

「无礙菴」（33）

『徒然草寿命院抄』（三—A—d—二九）

## 大阪府立図書館

大阪市北区中之島一丁目二七番地に所在する大阪府の公立図書館。住友家の寄付により、明治三十七年（一九〇四）開館した。当時は大阪図書館と称していたが、明治三十九年大阪府立図書館と改称する。大正十一年（一九二二）住友家の再度の寄付により左右両翼部分を増築し、ほぼ現在の姿となった。昭和四十九年（一九七四）に大阪府立夕陽丘図書館が開設されたことにより、名称を大阪府立中之島図書館と改めた。煉瓦および石造三階建中央円屋根付のこの建物は重要文化財に指定されている。

掲出書は蟻川五郎作旧蔵書。

「大阪府立図書館製本12・11」（16）

『周易乾鑿度』（一・二・三・四）



大西寛(一九一三—一九八八)

昭和期の書誌学者。大正二年(一九一三)生まれ。号は九十九木齋。永く国立国会図書館に勤務し、索引課長やアジア・アフリカ課長などを歴任、昭和五十二年(一九七七)整理部整理第二課を最後に退職した。在職中より蔵書中の印文に関心を払い、少なからぬ関係資料を残されているという。昭和六十三年(一九八八)没。また、木活字本コレクション等漢籍類の集書で知られているが、これは没後に四散した。

掲出書のうち『大清重刻竜藏彙記』『影印宋磧砂藏經首冊』『悉曇字記』の三点は中村菊之進旧蔵書、『経籍訪古志初稿本』は榎一雄旧蔵書である。

「九十九木齋主人」(13)

『満清紀事』(Ⅱ-五八二二)

\*『宋平江城坊攷』(Ⅱ-一D-三三\*)

『清嘉録』(Ⅱ-二一八〇二)

『大清重刻竜藏彙記』(Ⅲ-二一A-二二)

『影印宋磧砂藏經首冊』(Ⅲ-二一A-二三)

「大西氏蔵書」(21)

『清嘉録』(Ⅱ-二一八〇二)

『宋平江城坊攷』(Ⅱ-一D-三三\*)

\*『悉曇字記』(Ⅲ-二一J-八〇五)

『経籍訪古志初稿本』(E-〇二七・八二ホ-一〇〇二)



# 岡野他家夫

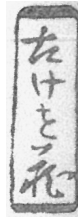


岡野他家夫（一九〇一—一九八九）

昭和期の近代文学研究家。明治三十四年（一九〇一）富山県高岡市に生まれる。筆名に丘竹之介・竹青居士・井荻山房主人などを称す。東京外国語学校を経て東京帝国大学文学部で近代日本文学を専攻する。大正十五年（一九二六）から東京帝国大学図書館に勤務。戦時中は統制団体日本出版会に務め、参事・出版相談課長・図書室長等を歴任した。戦後は日本大学の新聞学科創設に際して教授に招聘され、また国士館大学でも教授を務めた。東京作家クラブ会長の肩書も持つ。昭和二十六年（一九五一）には政府発起・国費支弁により組織された開国百年記念文化事業会の編纂主事となり、『明治文化史』『日米文化交渉史』の編纂事務に従事、同会解散後も無給で事業の後始末に努め事業会収集資料を東洋文庫に寄贈した。平成元年（一九八九）自宅に没す。著書に『明治文学研究誌』『日本出版文化史』などがある。戦前に収集の明治文学コレクションは東京都立図書館戦時特別買上文庫に収まる。

掲出書はいずれも開国百年記念文化事業会より一括受贈したもの。蔵書印によって東洋文庫に確認できる岡野旧蔵書は、新聞学関係の資料を中心に八〇件を超えている。『明治文学研究文献総覧』（Ⅶ―Ⅱ―A―四四）には奥付頁に蔵書票が貼り込まれる。

# 岡野他家夫



「岡野蔵章」(22) 『新聞太平記』(XII-五-L-d-三〇) ほか  
「岡野蔵本」(26)

『新聞学評論・一』(XII-五-L-d-二) ほか

「岡野他家夫」(46) 『新聞記事』(XII-五-L-d-五〇)

「岡野他家夫(大)」(57)

『占領二カ年』(XII-五-L-d-四八) ほか

「たけを蔵」(27)

『言論及び出版の自由』(XII-五-L-d-二五) ほか

「他家夫」(20) 『新聞』(XII-五-L-d-三二)

「OKANO」(15)

『民主的新聞のあり方』(XII-五-L-d-一八) ほか

小沢隆八（一八五七—一九三六）

大正・昭和期の漢学者。安政四年（一八五七）小沢弥吉（号は翠岳）の次男として武蔵国入間郡根岸に生まれる。琴山小沢藤太の弟。字は守拙。号は槐陰。明治になって間もなく上京し、史学を重野成斎に、詩文を鈴木松塘に学ぶ。書に優れ郷里に多くの揮毫が残る。入間市新久の龍田寺にある「北狭山茶場碑」は、彼の斡旋により重野成斎の撰文を得たもの。

明治二十九年（一八九六）松塘の娘礼子を娶り東京市向島柳原に分家。静嘉堂文庫の主事を務め、柳莊河田巖を助け目録類の編纂に従事する。明治四十年寺田望南と共に上海に渡り、陸心源旧蔵書の調査点検に赴く。昭和十一年（一九三六）没、多磨墓地に葬られる。

掲出書は井上準之助旧蔵書。

「守拙廬蔵書記」（28）

『杜律五言集解及七言集解』（IV-21B-802）





神尾式春（一八九三—一九八四）

大正・昭和期の官僚。明治二十六年（一八九三）士族神尾省二の長男として広島市に生まれる。大正七年（一九一八）東京帝国大学法科大学独逸法律科を卒業。福岡県属を振り出しに、山口県大津郡長、東京府理事官、朝鮮全羅南道警察部長、朝鮮総督事務官などを経て、昭和八年（一九三三）満洲国に聘せられ国務院総務庁秘書官、文教部学務司長、龍江省次長、参議府秘書局長などを歴任。国立中央図書館籌備処長・建国大学教授を兼任した。康德六年（一九三九）創設の満洲図書館協会では副会長に推されている。朝鮮本仏書の蒐集に努め一万余冊を集めたが、真珠荘と号した蔵書の悉くは終戦の際の混乱で失われた。辛うじて『道家論辨牟子理惑論』が影印で残るのみである。シベリア抑留を経て帰国、昭和五十九年（一九八四）没。著書に『東方文化雑考』『契丹仏教文化史考』『慧琳一切経音義反切索引』等がある。掲出書は中山久四郎旧蔵書。

「真珠莊蔵書印」（39）『新訂善隣国宝記』（X—五—B—四\*）

## 駒沢大学図書館

東京都世田谷区駒沢にある曹洞宗系私立大学の図書館。文禄元年（一五九二）駒込吉祥寺の境内に設けられた施檀林を起源とする。明治十五年（一八八二）東京麻布に移り、曹洞宗大学林専門本校を経て明治三十七年曹洞宗大学と改称した。大学図書館の初期の歴史は詳らかではないが、最初に専任の図書係が置かれるのはこの明治三十七年のことである。この時期には十分な図書台帳も備えられておらず、巷間に良書が流出したとの風説もあるという。大正二年（一九一三）現在地に移転、大正十四年の大学令により駒沢大学となる。昭和三年（一九二八）竣工の旧図書館「耕雲館」は東京都歴史的建造物にも選定されており、現在は駒沢大学禅文化歴史博物館（平成十四年（二〇〇二）開設）として保存・活用されている。

「駒沢大学図書館」（63）

『現代新聞雑誌批判』（Ⅷ―五―L―四四）  
「曹洞宗大学図書館」（22）

『第八回大蔵会展観目録』（Ⅱ―展―一―（五一九））

駒沢大学図書館







山西公立圖書館敬贈

#### 山西省公立図書館

民国期の中国山西省太原市上官巷の旧太原府文廟にあった公共図書館。今の山西省図書館の前身にあたる。その沿革は清の宣統元年（一九〇九）にまで遡るといが、民国八年（一九一九）成立の山西省教育図書博物館が直接の淵源である。民国十四年に山西省公立図書館と改称し、博物部門を図書館の付属施設とした。館長一名、副館長一名、その下に文牘・庶務・会計・管理の四部局が設けられ、それぞれに主任一名を置いた。民国二十年当時の蔵書は約一万冊。『山西省公立図書館目録初編』を刊行。重複本リストを用いて図書館間での資料の交換に取り組んでいる様子が垣間見える。所蔵の族譜一〇点が多賀秋五郎『宗譜の研究（資料篇）』に著録されている。民国二十二年（一九三三）名称を改め山西省立民衆教育館となる。

「山西公立図書館蔵書印」（49）

『和文漢訳読本』（I—九—B—八五）

「山西公立図書館敬贈」（72）

『山西省公立図書館目録初編』（II—一七—A—二九）

## 上智大学吉利支丹文庫

上智大学は、東京都千代田区紀尾井町にあるキリスト教系私立大学。その前身は、明治四十四年（一九一一）日本最初のカトリック系高等教育機関としてイエズス会の創設した上智学院である。大正二年（一九一三）上智大学（専門学校）と改称し、昭和三年（一九二八）大学令による大学に昇格した。附置機関である吉利支丹文庫は、元上智大学教授ラウレス（一八九一―一九五九）によって昭和十四年（一九三九）に設立された。現在、日本キリシタン関係書約一万五千冊を擁し、定期刊行物として『キリシタン研究』、『キリシタン文化研究会会報』を発刊している。

## 「上智吉利支丹文庫」（27）

『Historia de la Provincia de el Santissimo Rosario  
de Philipinas, ...』（〇―1〇―11）

## 「上智大学吉利支丹文庫」（24）

『Compendio historico, de la apostolica Provincia de San  
Gregorio...』（〇―1〇―11）





### 帝国図書館

明治後期から昭和前期にかけて東京上野に開設された国立図書館。上野図書館の通称で親しまれた。明治八年（一八七五）内務省博物館所属の浅草文庫は再び文部省の所管となり昌平坂に戻されたが、蔵書・備品の悉くを浅草文庫に留め置かれたため、名称を東京書籍館とし文部省所蔵図書をもって閲覧の用に供せざるを得ず、制度の上でも蔵書の面でも共に新設の図書館としての再開となった。これが帝国図書館の前身である。以後、東京府書籍館・東京図書館と名称を改め、東京教育博物館との合併・分離など設立母体の変遷を経て明治三十年に帝国図書館となる。その後も多難の道を歩み、明治三十九年新館の一部を建設して博物館からの移転を果たしたが、日露戦争による財政逼迫のため建築は未完のまま終わった。昭和二十二年（一九四七）名称を国立図書館に改め、昭和二十四年に国立国会図書館の支部となる。明治初年以來の納本制度によって収集された国内出版物を中心とする蔵書一〇〇万冊余の大部分は国立国会図書館に引き継がれた。大要は『帝国図書館和漢図書書名目録』で知ることができる。掲出書は、昭和三十七年（一九六二）頃に東洋文庫が一括して受け入れた古書肆弘文莊店主反町茂雄氏収集にかかる『古典籍展観書目』のうちの一点である。

「帝国図書館」（17）

『「江戸時代」震火災二関スル図画記録類展覧会目録』  
（Ⅱ―展―Ⅰ―（一二〇））

帝国博物館

明治後期に東京上野に開設された国立博物館。東京国立博物館の前身。明治五年（一八七二）文部省博物館として東京神田の湯島聖堂大成殿で博覧会を開催したことに始まる。その後、所管が内務省・農商務省・宮内省と短期間に変わり、所在地も内山下町・上野寛永寺本坊跡へと変転を重ねた。この間、明治八年から明治十七年にかけては、所管の図書資料を浅草文庫の名称で利用に供している。掲出書の『博物館書目解題略』と『博物館書目』が、浅草文庫の蔵書目録である。明治二十二年に帝国博物館・帝国京都博物館・帝国奈良博物館を設置する官制が公布される。明治三十三年（一九〇〇）東京帝室博物館と改称。戦後は昭和二十二年（一九四七）国に移管され国立博物館として再出発した。

「博物館印」（36）

\*『博物館書目解題略』（Ⅱ-Ⅰ-A-1008）

『博物館書目解題略』（Ⅱ-Ⅰ-A-1023）

「博物館」（33）『博物館書目・漢籍』（Ⅱ-Ⅰ-A-11）





徳川頼倫（一八七二—一九二五）

明治・大正期の侯爵、貴族院議員。明治五年（一八七二）田安家徳川慶頼の第五子として東京に生まれる。幼名は藤之助。明治十三年紀伊徳川家を嗣ぐ。読書を趣味とし蔵書に富み、その書室を九思斎と号した。明治十八年学習院に入学。のちに海外へ遊学し、英国ケンブリッジ大学留学中には欧米の図書館を数多く視察している。明治三十五年に東京麻布の邸内に南葵文庫を設立した。明治三十九年旧和歌山藩主侯爵茂承の家督を相続し貴族院議員となる。大正十一年（一九二二）宗秩寮総裁となり、また、東京地学協会・南葵育英会などの会長、史蹟名勝保存会・海事協会の総裁を務めた。大正二年（一九一三年）市島謙吉や和田万吉の要請で日本図書館協会総裁に就任する。多くの事業に関与したが、なかでも図書館事業については支援を惜しまなかった。晩年には関東大震災によって焼失した東京帝国大学附属図書館を復興すべく南葵文庫の蔵書約一〇万冊を挙げて寄贈している。大正十四年（一九二五）東京代々木上原の本邸で逝去、和歌山県海草郡浜中村の慶徳山長保寺に葬られた。

「旧和歌山徳川氏蔵」（35）

『日次記』（三丁H a—二五）

## 南葵文庫

明治後期から大正期にかけて東京市麻布区飯倉の徳川侯爵邸内に開設された私立図書館。南葵文庫総裁は徳川頼倫が務めた。もとは自家伝来書を旧藩子弟や篤学者に利用させる私文庫を、明治四十一年（一九〇八）あらためて整備し公開したもの。『南葵文庫蔵書目録』がある。蔵書の閲覧にとどまらず学術講話会を開くなど広く学芸啓蒙の場を提供した。大正十二年に関東大震災により東京帝国大学図書館が焼失すると、これを憂えた徳川総裁が全蔵書の寄贈を決め、大正十三年（一九二四）図書館組織としての南葵文庫の歴史は幕を閉じる。旧蔵書九万余冊は、特殊コレクション「南葵文庫」として東京大学総合図書館に引き継がれている。また、明治三十二年竣工の旧館建物は国指定の文化財に指定されており、静岡県熱海市伊豆山に移築され現存する。

掲出書にはいずれも表紙右下に、南葵文庫であることを明示する朱色で印刷されたラベルが貼付されている。

「南葵文庫紀伊徳川（小）」（32）

\*『畠山家譜』（X—五—L—d—二四）

『日次記』（三—H—a—八—二五）

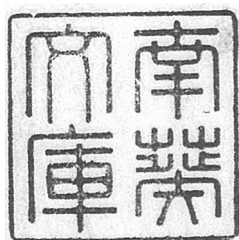
『経俊卿記』（三—H—a—八—二八）

『経卿記』（三—H—a—八—二八）

『水左記』（三—H—a—八—三四）

『兼宣公記』（三—H—a—八—三五）





「南葵文庫紀伊徳川（大）」（60）

\* 『新編古今事文類聚』（Ⅶ―三―九〇）

『介志』（三―J―a―ろ―五〇）

『木水魚譜』（三―J―a―ろ―八一）

「南葵文庫（単郭）」（30） \* 『介志』（三―J―a―ろ―五〇）

『木水魚譜』（三―J―a―ろ―八一）

## フーバー図書館

アメリカ・カリフォルニアのスタンフォード大学にある研究図書館。正式名称は、「戦争、革命と平和に関するフーバー研究所」という。創設者ハーバート・フーバーは後にアメリカ大統領をも務めた人である。もともと所蔵資料の中核をなすのは欧文の文献で、東アジアコレクションは第二次世界大戦後になって集中的に資料収集が図られたものである。一九五七年には大学内に東アジア研究委員会が設置され、一九六一年に日本関係資料と中国関係資料が東アジアコレクションとして統合。一九七〇年代半ばには中国語文献十五万冊、日本語文献八万冊の蔵書数に達している。二〇〇一年以降は中央図書館の分館の一つ、スタンフォード大学東アジア図書館として知られている。一九四一年に開館のフーバートワーは今も大学内のシンボルの存在である。

## 「DUPLICATE HOOVER LIBRARY」(5)

\* 『抗戦中的中国政治』(一〇三八)

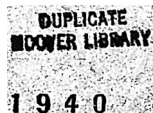
『抗戦八年来的八路军与新四軍』(一〇三九)

## 「HOOVER LIBRARY」(16)

\* 『国際劳工組織与中国』(一〇三六)

『金融法規大全』(一〇三七) ほか

「HOOVER LIBRARY (小)」(11) 『駁蒋介石』(一〇四三)





福岡図書館				
類名	冊数	函	架	號



# 福岡図書館

明治から大正にかけて福岡市荒戸町にあった私立図書館。明治三十五年（一九〇二）出雲大社教福岡分院境内に設立された。開館当初の蔵書数は約二万三千冊。創設者の広瀬弦銀は島根県簸川郡の出身で代々出雲大社の社家の家系に生まれ、福岡分院長として九州地方での出雲大社宣布を担当していた。国学者の江藤正澄も図書館設立に尽力しており、開館六年目には蔵書も七万冊を超えた。大正五年末の広瀬の死と翌年の福岡県立図書館開館によりその使命を終え、蔵書および建物を処分して大正六年（一九一七）に閉館した。閉館までの一六年間で延べ三万人の利用者があったという。大正十四年に蔵書の一部が九州帝国大学附属図書館に一括寄託され、戦後は九州大学の所有に帰し「広瀬文庫」として現存する。掲出書は、昭和十六年（一九四二）松村太郎氏の寄贈によるもの。

「福岡図書館 類名冊数函架号」（37）

\* 『対清弁妄』（XII 三・A・四二）

『対清意見』（XII 三・A・四二）

「福岡図書館蔵書之印」（42）『対清弁妄』（XII 三・A・四二）

\* 『対清意見』（XII 三・A・四二）



藤本重郎（一八四九—一九三四）

明治・大正期の社会教育家。嘉永二年（一八四九）鳥取県東伯郡東伯町八橋に生まれる。明治十三年（一八八〇）県会議員に選出されて以来、河村郡第二連合戸長、八橋小校長などを歴任する。明治二十一年に川合清丸が日本国教大道社を設立すると、その幹事として全国に奔走する。明治三十七年の帰郷後は、蔵書五万冊をもって私立図書館「藤本文庫」を開設し、郷土の子弟に勉学の間を提供した。大正四年（一九一五）から東伯郡立通俗簡易図書館の書記を務める。昭和九年（一九三四）に没。旧蔵書の半ばは米子図書館に蔵せられたが昭和三十四年（一九五九）に廃棄処分とされたという。

「藤本重郎蔵書之印」（44）

『忠烈実録』（VII-二三〇五）

「藤本文庫」（40）

『忠烈実録』（VII-二三〇五）



#### 撫順図書館

旧満洲（中国東北部）の撫順市に設置された公共図書館。明治四十三年（一九一〇）南満洲鉄道撫順炭鉱職員倶楽部内に設立された図書室に由来する。この図書室が沿線住民向けの撫順簡易図書館と統合して撫順図書館となった。昭和五年（一九三〇）『撫順図書館報』創刊。康德四年（一九三七）の蔵書数は三万冊余り、職員数は九名であった。この年、満鉄附属地行政権の移譲と共に図書館も満洲国に移管され、最終的には奉天省撫順市立図書館となる。

「撫順図書館」印は、昭和十二年（一九三七）に日本図書館協会の全国図書館大会が満洲で開催された際に、これを記念して作られたスタンプである。大会終了後は受入日付印として使用された。

この図書館大会には東洋文庫からは岩井大慧が出席しており、総会のほか北支旅行にも参加している。また、岡野他家夫も府立高等学校講師兼図書館司書の肩書で出席していた。撫順図書館の見学は大会四日目の六月六日に行われている。

「撫順図書館」（55）

『撫順図書館報』（Ⅳ―三七）



# E. VELARDE

## ベラルデ文庫

マニラ在住のスペイン人宣教師ベラルデ家が三代にわたって収集したフィリピンを中心とする南方諸地方の社会・歴史・宗教・経済・文学・民俗など広範囲にわたる収書。国際的に見ても極めて貴重なコレクションである。台北帝国大学の浅井恵倫教授や実業家の金ヶ江清太郎らの尽力により、白鳥清教授の主宰する南亜細亜文化研究所が原田積善会から助成金を得て、昭和十六年（一九四一）購入し日本に招来されたものである。ところが、『南亜細亜学報』一号に日本到着の報があるものの、同研究所の解散や終戦前後の混乱などにより消息を絶ちながら行方不明とされていた。その後、白鳥清教授のもとに保管され、その没後は令息の白鳥芳郎上智大学教授によって管理されていたことが判明、昭和六十三年（一九八八）東洋文庫に寄贈されることとなった。文献総数三六四部四七八冊。平成五年（一九九三）『ベラルデ文庫目録』が刊行されている。

『BIBLIOTECA FILIPINA EMILIO VELARDE』(19)

\* 『Historia de la Provincia de el Santissimo

Rosario de Philipinas...』(O-10-11)

『Compendio historico, de la apostolica Provincia

de San Gregorio...』(O-10-11) ほか

『E. VELARDE』(3)

『Club directory of the Philipines. 1925』(NIX-9-A1)



森潤三郎（一八七九—一九四四）

明治・大正・昭和期の近世史研究家。明治十二年（一八七九）東京の生まれ。号は牽舟。森鷗外の末弟。幼少より読書を好む。京都大学を卒業し、東京帝国大学史料編纂所に奉職。明治四十二年より京都府立図書館に勤務。細川開益堂の「ほんや」編集に携わり自らも執筆した。また、『陽外全集』の編纂にも従事した。諸侯旗本の事蹟研究に詳しく資料整理に手堅い。『考証学論攷』にその業績が収められる。昭和十三年『牽舟文庫展覧目録』。昭和十九年（一九四四）没。史料編纂所に特殊蒐書「森潤三郎氏旧蔵史料」一五四点がある。掲出書はすべて反町茂雄旧蔵『古典籍展観書目』として一括されている資料である。

「牽舟文庫（小）」（30）

\*『市川家歌舞伎展覧会』（Ⅱ展—一（二二））ほか

「牽舟文庫（大）」（63）

『図書陳列目録・第八回』（Ⅱ展—一（四七））

「牽舟文庫（単郭）」（37）

『天覧図書目録』（Ⅱ展—一（二一〇））

\*『旧藩「古書画古器物」展覧会出品目録』

（Ⅱ展—一（五四九））

和田万吉（一八六五—一九三四）

明治・大正・昭和期の国文学者・図書館学者。慶応元年（一八六五）美濃国大垣に藩士和田為助の子として生まれる。号は須々紀乃屋、卍子、曼子。狂名に舟屋重右衛門（舟重）を用いる。明治二十三年（一八九〇）東京帝国大学文科大学国文学科を卒業。同大学書記に職を得、図書館管理・助教授兼図書館司書官を経て、明治三十年より附属図書館長を務める。明治四十三年欧米各国に留学。帰国後わが国最初の図書館学の講義を行ない、大正七年（一九一八）東京帝国大学文学部教授となる。大正十二年の関東大震災では附属図書館の蔵書を焼失し館長を引責辞任。退官後は国学院大学・政法大学・東洋大学等で講師を務めた。この間、日本文庫協会（後の日本図書館協会）の創立・発展、文部省図書館員教習所の創設に尽力した。古経・謡曲・書画に造詣が深く近松・西鶴・馬琴などの作品の校訂にも努めた。『岩崎文庫和漢書図書目録』の編者。著書に『図書館史』『古版地誌解題』『謡曲物語』など。昭和九年（一九三四）本郷西片町に没す。

「和田蔵書」（22）

『合類書籍目録大全』（Ⅱ—ⅠA—一〇八七）

（国立国会図書館司書）

